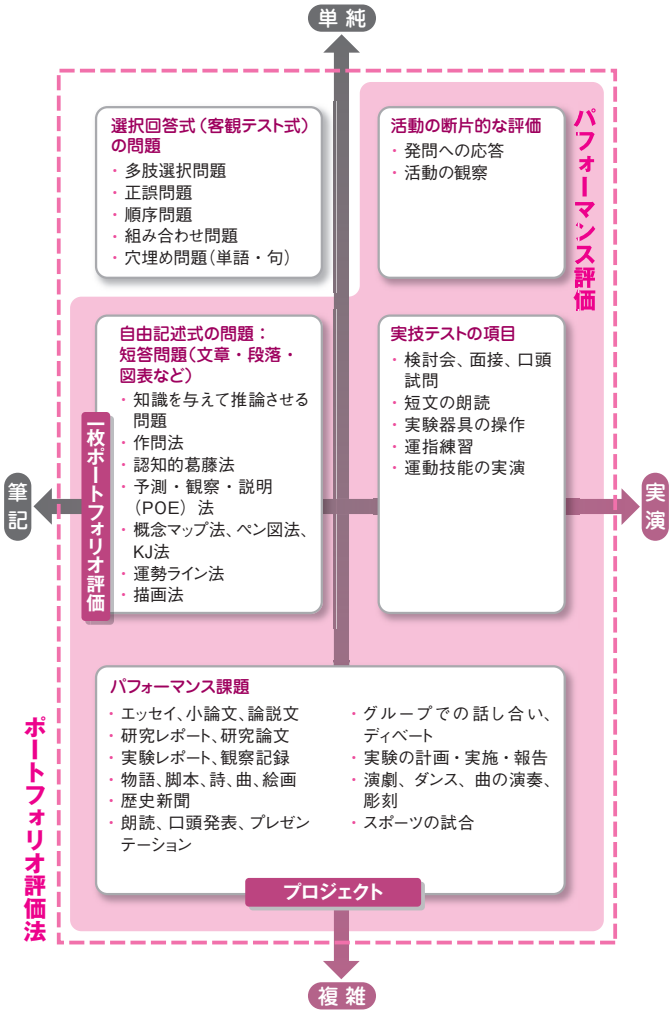
多面的な評価方法によって「自分と向き合える力」を付ける

京都大大学院教育学研究科准教授　西岡加名恵

指導の改善を目指す時、鍵となるのが学習評価だ。特に、思考力・判断力・表現力は、どのように評価をすると良いのだろうか。「生きる力」を育てる学習評価のあり方について、京都大大学院の西岡加名恵准教授に聞いた。

図1　学力評価のさまざまな方法



出典／『「活用する力」を育てる授業と評価　中学校―パフォーマンス課題とルーブリックの提案』（西岡加名恵・田中耕治編著、学事出版）

学習評価の現状と課題

指導改善に結び付く評価が出来ていない

これからの学習評価のあり方を考えるために、まず現状の課題を整理しましょう。

1つめは、学習目標に対して適切な評価方法が設定されていないことが挙げられます。ご存じのように、新学習指導要領では思考力・判断力・表現力の育成が強調されており、小学校ではそれに対応する学習活動が充実してきています。ところが、評価方法は依然として客観テストなどが中心になりがちです。これでは、せっかく伸ばした思考力などを十分に評価できません。

2つめに、具体的な評価基準のあり方を再考する必要性が挙げられます。従来の評価基準はチェックリスト型が大半であり、正答率が何パーセントかといった観点で評価されてきました。しかし、思考力などの評価には、「出来た・出来ない」ということよりも、「どれくらい出来たか」といった定性的な視点が重要となります。チェックリストではそれを見落としてしまう危険性があります。

3つめに、評価が指導の改善に十分結び付いていないという課題があります。「指導と評価の一体化」はよくいわれることですが、評価自体が目的になっているケースが見受けられます。子どもの実態を踏まえた指導の改

善によって学力を向上させることが評価の目的であることを、いま一度意識する必要があると思います。

これからの学習評価のあり方

成果物によって知識・技能を活用する力を測る

こうした課題を克服し、思考力・判断力・表現力を含めた学力を適切に評価するためには、さまざまな学習評価の方法を組み合わせる必要があります（図1）。

自動車の運転免許の取得試験に例えて説明しましょう。筆記試験は「知識」、実技試験は「技能」を問うテストだと考えられます。しかし、運転免許の取得には「知識」と「技能」の点で合格しただけでは不十分で、路上検定も行われます。これは、リアルな路上の状況において、習得した「知識」「技能」を必要に応じて引き出しつつ「活用」する力を試す検定です。

同様に、教育活動においても、授業などで学んだ「知識」「技能」を、日常生活や将来の人生に「活用」できるかどうかを測り、評価することが必要なのです。

私は、学習評価の路上検定に相当する考え方として、「パフォーマンス課題」を提案しています。これは、子どもが生み出した作品や実演（パフォーマンス）を評価する方法です。小学校では、レポートや絵、歴史新聞、観察記録、話し合い、発表などが課題として出されます。これは、知識と技能を活用して取り組むものですから、学力を多面的に見るためには最適な評価方法です。

しかし、作品や実演の評価基準は、必ずしも明確になっていないようです。教師の主観に偏ったり、評価の観点がずれていたりする場合があることも否めません。そこで、出来るだけ一貫した評価にするために、ルーブリック（評価指標）を用います。

ルーブリックは、複数の教師の話し合いによって作成するものであり、評価に妥当性や信頼性を持たせます。例えば、子どもが作った作品を並べ、教師が付せん紙に評価を書いて裏面に貼っていきます。最後に付せんを表面に貼り直し、作品をレベル別に分類して特徴を読み取ります（P.24図2）。このようなルーブリック作りに共同で取り組むことで、教師の間で評価基準の共通理解が進むでしょう。更に、長期的ルーブリックを作れば、1年間、ひいては6年間を見通して子どもに付けたい力を意識できるようになります。

授業の成果を可視化する方法を取り入れる

アメリカでは、1990年代から2000年代にかけて、客観テストの結果によって学

にしおか・かなえ◎バーミンガム大博士課程修了。鳴門教育大講師を経て、現職。専門は教育方法学。カリキュラム論・教育評価論の研究に力を注ぐ。主著に『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校―パフォーマンス課題とルーブリックの提案』（学事出版）、『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（明治図書出版）など

図2　3年生算数「重さをしらべよう」の課題で作成したルーブリック

尺度	記述語
レベル3 理想的	重さを正確に量るための方法を意欲的に考え、様々な重さの測定法の長所・短所を理解し、その場に応じた適切なはかりを選び、重さを正確に測定することができる。
レベル2 合格	重さを数値化し、普遍単位を使って表すことの良さに気づき、いろいろなはかりの正しい使い方や目盛りの読み方を身につけ、その場に応じた適切なはかりを選び、重さを正確に測定することができる。
レベル1 乗り越えさせたい実態	測定物に応じた適切なはかりの選び方、正しい使い方、目盛りの読み方を身につけていないため、重さを正確に量れない。

出典／『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（西岡加名恵編著、明治図書出版）

図3　「本質的な問い」と「本質的ではない問い」の例

「本質的な問い」の例	「本質的ではない問い」の例（「重要ではない問い」ではない）
1. その国の特徴は、どのように捉えられるのか？	1. 中国の人口は何人か？
2. 星は天球上をどのように動くのだろうか？	2. 今日の日の出の時刻は何時か？
3. この音楽のイメージは、どのように捉えられるのか？	3. この曲の名前は何か？
4. 自分の思いを色を使って表現するには、どうしたらよいのか？	4. 色はどのように分類されるのか？
5. 自分の言葉で自分の考えや意見を述べるには、どうすればよいのか？	5.「もし～だったら」という表現は、どう作文すればいいのか？

「本質的な問い」は、一問一答では答えられないような問いであり、さまざまな知識や技能を総合することを促すような問いである。学問の本質に迫る問いであり、また、生活との関連が見えてくるような問いでもある

出典／『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』（西岡加名恵編著、明治図書出版）

校の説明責任を求めようとする政策が導入されました。しかし、客観テストで評価できる学力は一部であるという反省から、子どもの実態をより定性的に見取っていこうとする考えが生まれた経緯があります。

日本でも、現在、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」などによって、学力の底上げが全国的に図られています。それはもちろん大切なことですが、その結果ばかりに目が行くと、筆記テスト対策の反復学習が中心となり、子どもの学習意欲をそいでしまう危険性があります。

従来、日本では、子ども同士による多様な教え合いや学び合いを重視することで、高い教育水準を保ってきました。それを支えた教師の指導技術の高さの背景には、校内研究などを通して教師同士が学び合う文化があったといえるでしょう。これからも、そうした学び合いを大切にすると共に、これまでは見えにくかった思考力・判断力・表現力を可視化することで子どもの多様性を捉え、伸ばしていっていただきたいと思います。

なお、パフォーマンス課題を作る際には、「本質的な問い」を考えることが大切です。それは、成績を付けるための問いではなく、子どもの「生きる力」を伸ばす問いです（図3）。例えば、「模擬国連子ども会議で発表するために、平和のために自分たちが出来る意見書を作り上げなさい」という課題では、平和のために自分たちが出来ることは何かを真剣に考えるでしょう。

「本質的な問い」は、生活の中で身に付けていった知識や技能を使って考えることも出来るため、暗記が苦手というような子どもを伸ばすことにもつながります。このような本質的な学習の機会が増えることを期待しています。

指導を改善するための工夫

指導改善に結び付く評価を含めた単元作りを

学力向上へとつながる効果的な学習評価を行うには、評価にめりはりをつけることも大切だと、私は考えます。多くの学校の評価計画は細かすぎて、教師が評価をすることに疲れてしまっています。

1学期に1つでもよいので、「この単元のこの活動を丁寧に見取ろう」などと焦点化することも必要ではないでしょうか。指導要録は法的に義務付けられているもので様式を大幅には変えられませんが、通知表は学校の方針を反映させてよいものです。「この単元では思考力・判断力・表現力をよく見るが、あの単元は知識と技能を重点的に見る」というような濃淡があってもよいと思います。

また、これまで以上に「指導に生かす評価」を意識することも重要でしょう。評価は、子

どもが指導によってどれだけ力を付けたのかを見取り、次の指導の工夫を考えるためにあります。

そのための単元作りで重要なのが、次に示す「はひふへほとさ」で表されるような7つの要素を意識することです。これは、元々、アメリカの評価研究者であるウィギンズとマイタイが、「逆向き設計」論の中で提唱している考え方を、私が和訳したものです。学習評価において重要な考え方だと思いますので、それぞれ説明しましょう。

は　はっきりとした見通しを与え、

子どもが主体的に学習に取り組むには、単元の最初から「今回は何を学ぶのか」という見通しを与える必要があります。

ひ　一人ひとりを惹きつける。

課題は一人ひとりにとって、魅力的なものでなくてはなりません。例えば、歴史新聞を作るに当たって、モデルとなるような作品を示して、やる気を引き出すのも1つの方法です。

ふ　不安がないよう用意させ、

思考力・判断力・表現力を発揮させるためには、単元を進める過程で材料となる知識・技能を与えて不安を取り除く必要があります。「自分に歴史新聞が書けるだろうか」というような最初に抱いた不安は、徐々に知識や技能を身に付けていくことで払拭されます。つまり、知識を与えてから応用に移るという発想から、応用する機会を考えつつ必要な知識・技能を学ばせるという発想に転換するのです。

へ　下手なところは改めさせる。

最初から目標を十分に達成できる子どもばかりではありません。子ども同士の検討会などで、やり直し、修正する機会を与え、目標へと近付けていきます。

ほ　本人に自覚を促す自己評価。

どこが出来て、どこを改善しなくてはならないのか、子ども自身が正確に自己評価を出来るようにするための指導も大切です。

と　ところで個人差、どうするか？

教室には多様な子どもがいますから、それぞれ足りない部分への支援を考える必要があります。例えば、読む力に課題を抱える子どもには、課題を理解させるための支援が必要でしょう。また、同じ課題でも、受け手によって魅力的であったり、そうでなかったりします。場合によっては、複数の課題を用意することを考えてもよいでしょう。

さ　最後に全体、見渡そう。

こうした単元の指導計画を立てる上では、さまざまな要素を取り入れる必要があります。現実には時間に限りがありますから、それらの要素の中で重要なものを取捨選択し、より効果的な指導が出来るように配置しましょう。

先生方への期待

多面的な学習評価で「生きる力」を育む

最後に、学習評価について考えるに当たり、そもそも学校はどのような場であるのかについて、立ち戻ってみたいと思います。社会に出ると、人と交渉したり、柔軟に対応したり、新しいものを生み出したり、メディアの発信する情報を理解したりと、さまざまな力が求められます。学校はそのような生きるために必要な力を平等に保障する機関だといえるでしょう。

「生きる力」と筆記テストで測る学力とはよく対比的に語られますが、それは違うと私は思います。筆記テストやパフォーマンス課題など、さまざまな方法で評価される力は、全て「生きる力」につながっています。

私が指導する大学生を見ていても、自分のやりたいことが分かっている学生は、困難にぶつかっても乗り越えられるだろうと感じさせる強さを持っています。外的な評価に左右されるだけでは、環境の変化に柔軟に対応できません。「自分がどこまで出来ていて、次に何を目指したいのか」という自己評価力、つまり、自分と向き合える力を付けることを、小学校の段階から意識していただきたいのです。それは、多面的な評価によって育まれる部分が大きいと、私は思います。